

授業の具体的展開例

T では、ノートに書いた文を声に出して読んでみましょう。

C 〈各自、自分のノートをもって音読をする〉

T つぎは、となりの人とノートをかえっこして、読んでみましょう。読むときには、小さな声を出して読んでかまいません。

C 〈ノートを交換して文を読み合おう〉

T となりの人が書いた文を読んでみて、どのようなことが書いてあったか、よく分かりましたか。よく分かったら、「よく分かったよ。」と言ってあげましょう。分からないところがあったら、聞いてみましょう。

C 〈ペアで話し合い〉

T となりの人と、どんなお話をしましたか。みんなに教えてください。

C ○○さんは、「中庭の池に、小さなカメが三びきいます。」と書いていて、よく分かりました。

T どのようなことがわかりましたか。

C 池に、カメが、いることが分かりました。

T そうですね。「なにが」、「どうしている」か、きちんと書いてあるからよく分かるんですね。他に、○○さんの文のよいところを見つけた人はいませんか。

「主語」「述語」は、第2学年で学習するが、このような言葉で、意識させることが大切である。

どのようなことを言えばいいの、具体的に示すことで、全員が交流や話し合いに取り組めるようにする。

低学年では、自分が書いた文などを声を出して読む学習活動を数多く設けたい。音読することで、全員が文字や文表現に意識を向けることができる。

板書例

よむわかるよむ
じゅんじよをかんがえてかこう。

いばるる文

- カードを見る。
- かみじゆきん。
- となりの人にはなす。
- ノートにへ。

学校に、もこというモルモットがいます。

〇〇〇〇

中にわのいけに、カメが三びきいます。

なまな

よむわかるよむ
じゅんじよをかんがえてかこう。

〇「」「」をなへ。

※この時間のもっとも中心となる学習内容を意識できるように、板書を工夫する。

※学習の手順を明確に示すことで、児童が自分の力で学習を進めていけるようする。

「活用」の力を育てるポイント

低学年では、学習の手順を細かく区切って、児童に理解させながら指導していくことが大切である。児童は、そのような学習の積み重ねにより、自分の力で学習を進める力を身に付けることができる。

本時の流れへ

単元の流れへ

評価問題

HOME